

## 新企画

## 第1回

日本初の  
女性結社の誕生

—福田英子と岡山女子懇親会—

## 草の根の女たちのあゆみ

女性史 研究者 折井美耶子

## 岸田俊子岡山に

一八八二（明治一五）年五月二日の「山陽新報」に、

## 「政談演説会

来ル十三日、十四日、午後七時ヨリ

東中山下心明座ニテ開会

演者 林 包明 岸田とし女

小林権雄 満藤 恒

種田 稔 小山恵三郎」

という広告が載りました。

岸田とし女こと岸田俊子は、京都の呉服商の娘で幼少より明敏で知られていましたが、一七歳で宮中に入り文事御用掛として皇后に「孟子」などを進講していました。二年後、辞職し各地を遊歴するうち、高知で自由民権運動に出会い、二〇歳のとき大阪で行われた日本立憲政党的演説会で、「婦女の道」と題してはじめて演説をしました。その弁舌と美しい容姿

この連載は、近代日本の「草の根の女性のあゆみ」を、できるだけ全国（ブロック別）を網羅し、分野も多岐にわたるように努力して、特徴的な女性や出来事を年代順に追っていく予定です。

（18回連載予定）



に人びとは熱狂しました。岡山での演説会は二日も超満員、俊子は「岡山県女子に告ぐ」と題して、「女権拡張」を説きました。一七歳の景山（福田）英子は、その演説を感激して聞き、自分の進むべき道をそこで感じたのです。

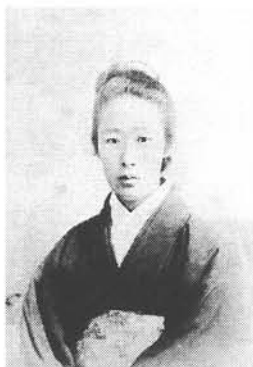
英子は一八六五（慶応元）年一〇月五日、岡山で生まれました。

父景山確は備前藩の下級武士、母は榎子（うめこ）といいました。

英子が生まれてまもなく明治維新、禄を離れた士族たちの生活は苦しいものでした。榎子は、女子教育に関する県の通達によって開

かれた女子教訓所の教師となりますが、所長と意見があわずすぐ辞めて家塾を開きました。榎子はきわめて意志の強い、しかしさっぱりとした気性の持ち主でした。「女たりとて将来は無学で通るもの非ず、出来る限り学問すべし」というのが榎子の意見で、英子はその影響を強く受けながら育っていきました。英子は新学制の小学校を卒業すると、すぐ助教員となり働きはじめました。

その年、岡山では県会が開かれ、それをきっかけに国会開設の要求、自由民権運動も高まりました。英子の周囲にも自由民権運動に心をよせる人びとがいて、若い英子に影響を与えました。榎子も英子の弾く月琴に合わせて、当時流行した大津絵ぶしをよく唄っていました。その歌詞は「雲や霞も程なく消えて、民権自由に、春の時節がおつつけ来るわいな」といった民権思想の色濃いものでした。英子に最も大きな影響



中島俊子



福田英子

絵・写真は、「女性解放の先駆者たち」(清水書院)より

を与えた人は、友人の兄小林樟雄（あき）でした。二人は自由民権思想を同じくする同志として、やがて結婚を約束します。

### 女性だけの結社・演説会

そのころ岸田俊子が来岡しました。俊子が去ったあと、岡山の女性たちは岡山女子懇親会という団体を組織しました。それは、日本で最初の女性結社でした。参加した女性たちは英子のほか津下久米、竹内寿、上森操、炭谷小梅など三十数名でした。津下久米は当時四八歳、民権家で炭問屋を営んでいた津下正五郎の妻でした。自由党総理板垣退助がテロにあった際、竹内寿とともに大阪に見舞いに行き、岸田俊子に会って俊子をつれて岡山に帰ってきたのでした。寿は自由党员竹内正志の母で当時五三歳、夫三郎も民権家でした。上森操は漢学者の娘で、懇親会の幹事長となりました。炭谷小梅は早くに父母を失い、維新前後生活のため芸者になりましたが、

中川横太郎に落籍され、のち神戸のガールズスクール(現神戸女学

院)に学びキリスト教に入信しました。このように女子懇親会の人びとは、経済的にも知的にもある程度恵まれている階層であるとはいえ、年齢は一〇代の娘から五〇代(当時の五〇代は老齢だった)の女性まで幅広かったです。

会の規約第二条「目的」には、「本会八天地ノ公道ニ由リテ女子ノ節操ヲ守リ女子ノ陋習ヲ除キ及ビ児童教育ノ法ヲ明ニスルヲ以テ目的ト為ス」とあり、自由平等の理念に基づく新しい女性道德と児童教育をめざしていました。

その年九月二一日、女子演説会が開かれ、久米、英子、操の三人が演説しました。聴衆は女性だけに限りましたが、五、六十名の参加があったと「山陽新報」は報じています。翌一八八三年の四月一日に開かれた政談演説会の演題は、英子「人間平等論」、岡田八重子「石が流れて木の葉が沈む」、炭谷小梅「谷間の桜」、上森操「女子と小人養い難し」でした。

### 学校設立

この年英子は助教員を辞め、母

や兄、寿、久米たちと協力して女子のための私塾蒸紅学舎を設立しました。その設立の趣意書には、女性たちに基礎的な学問をする場、貧しい家の娘でも夜勉強できる場を設けるとあり、授業は午後三時からと、六時からの二部制になっていました。英子にとって女性の自主独立のための学校は、その後終生の事業となりました。しかしこの学舎は翌年岡山県令から「詮議之次第有之」と、九月九日、一方的に閉鎖命令を受けます。「詮議之次第」とは、八月に行われた自由党の納涼大会に参加したことをさしていました。自由民権運動に対する政府の弾圧は、次第にきびしさを加えていました。不当な弾圧によって学校閉鎖に追い込まれた英子は、県当局のみならず、それを指導する政府に対し闘うべく、ひそかに岡山を出立し上京しました。

### 東洋のジャンヌダルク

その後、英子は自由党の大井憲太郎たちの企てた、朝鮮改革運動にかかわっての大阪事件に連座



福田英子記念碑（右、岡山市の笠井山公園）とその碑文（平塚らいてう書）

我が過ぎ去るは涙の  
 途に致へり 涙のたれに  
 曾て一度も恨みしや  
 平塚らいてう

し、紅一点の国事犯として東洋のジャンヌダルクといわれました。この裁判中から大井と恋愛関係におちいり、出獄後結婚を決意しますが、すでに大井には妻があり、そのみか他の女とも関係をもっていました。妊娠した英子は出産後さっぱりと大井との関係を断ち、自立をめざして郷里から家族を呼び寄せ、一家で神田に女子実業学校を創設しました。しかし家族の不幸が続き、学校は立ち行かなくなり、何とか生活再建を模索していた時、ミシガン大学を卒業して帰国した福田友作と出会い、結婚します。アメリカ生活をしていまいか、英子が書き物をしていると、友作が台所に立つことも珍しくなかったといいますが、友作の家は旧家で、「女壮士」といわれた英子との結婚を歓迎しませんでした。英子が三男を産んだのち、友作は三十六歳で亡くなりました。

再び英子は新宿に、角筈女子工芸学校を設立しました。そのころ隣家に越してきた社会主義者の堺利彦と知り合い、社会主義思想を学びました。一九〇四年に出版し

た自伝『妾の半生涯』では「先に政権の独占を憤られる民権自由の叫びに狂せし妾は、今は赤心資本の独占に抗して不幸なる貧者の救済に傾けるなり」と述べて、自由民権思想から社会主義思想への転換を明らかにしました。女子の政談演説会への参加や政治結社への加盟を禁じた治安警察法第五条は、かつて自由民権運動のなかで自由に政治的発言をした英子にとって承服できないものであり、平民社の若い女性たちとともに、その改正運動に参加しました。日本最初の公害問題、足尾鉍毒被害の谷中村救援活動なども活発に行っていました。

### 『青鞥』への寄稿も

一九〇七年一月には婦人解放を掲げた月二回刊の雑誌（形は新聞）『世界婦人』を発刊しました。

英子の発刊の辞によれば「現在社会の状態を見れば、殆ど一切の事情は婦人の天性を迫害し圧塞するものであります。されば勢ひここに婦人自身の社会運動が起らねばなりません」とあります。『世界婦人』

の名に恥じず、各国の婦人参政権運動なども紹介していますが、政府の圧迫のため一九〇九年廃刊となりました。一九一三年には平塚らいてうたちの『青鞥』に「婦人問題の解決」を寄稿し、このため『青鞥』はこの号が発禁となりました。

自由民権から社会主義へ、真の女性解放をめざして苦難の道を歩んだ福田英子の碑は、その出発点となった岡山の笠井山公園に、らいてうの書によって刻まれ建っています。（一九二七年五月二日永眠、享年八三歳）



おりい みやこ

1935年生まれ。40歳から女性史研究の道に入る。社会教育関係の講師、大学の非常勤講師などを勤める。著書『薊の花』、『資料性と愛をめぐる論争』（編著）、『新宿女たちの十字路』（共著）ドメス出版、『夫婦別姓への招待』、『歴史に人権を刻んだ女性たち』（共著）かもがわ出版 ほか